

寒僧：和文：文苑

著者	寒山
雑誌名	龍南會雜誌
巻	7 1
ページ	3 7 - 3 9
発行年	1899-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2298/5236

附言。我れ前號雖欄内同く「瘦骨」の名を以て存疑二件を草す往々にして累を他人に及すありと聞く。瘦骨は矢張一難報子。「存疑二」案を吾れ一箇の所懐に過ぎざるを以て爾く記名せり決して他よりの投書にあらざるなり。

文苑

和文

寒僧

寒山

凡にもたれて瞑想せる年まだ二十の上を多くは越さぬ青年の口より洩れ出てしは是なりき。あはれ如何に世界を觀じたりけむ。

~~~~~

れん僧よ。御身の境遇をおもふほど世にかなまき事はあらじ。世に云ひまらずゆかしくまなはしきわれもうき世はいとふ身のはかなき世のはだしにつながれては、またわれと身を墨の衣にやつしもえさず、夢の世に夢の如き樂みなしみのゆきかふ中にさまよふてゝくるまよ。まばしはゆるせ、想像の雲にのりて御身の傍にさまよはむ。

もとより御身とて、形骸こそ異なれ心あり情あるものゝ喜と悲と苦と樂との境涯を脱し玉ひしにはあらざるべし。さるは人として得へき事かは春さりくれば花に

心通まり、誠に雪のふる日は寒かるべきに、たい山門の中には自ら浮世にかよふべきうき事の至らぬものと知られぬ。

香を焼きて讀書するを一世の思出とて、朝夕の水くみかふるに心の垢も自ら洗ひ去られぬべうおもはれてなん、緑林の人、方外之士、此の世に於て益なきものにさげすむやからも多かりぬべし、輕羅香裙、肥馬玉鞭、自らはいみじとおもはめど、さめてはくやまかりぬべき春の夜の夢、花の一時もろきはいつれ世の定にて、富榮、權威、いづれか悠久のものぞ。爭亂、怨恨、煩悶のみ拂へども盡きす追へども去らぬうき世なれば、宵々毎にあはれみの眼を以て下界を照す新星の影も、雲の絶間にあらはるゝ新月の影も、塵にくもりし世の人の眼には見ゆすやあらむ。古塔苔とさすあたりふくろふさけぶところに、世を果敢なうなめやりたらばいかにぞや、落葉ふりつむ宿に世をうからず面白からず獨すみえたらばとよ。あゝおもはじ、われはうき世の人にあらずや、さらぬだにうき世なるものを、さるおもひありて世にあらば一入うさのまげからむに、此の世に生れ出てしを不運とあきらめなえて見ばや、いざ。

%% %% %% %% %%

戀にもえ功名にくるひ、妄想にかられ感情に走るは年若きやからにありがちのとゝきく。こはやがて其一つならずや。大智徳の人より見たらばいかに可笑しくもあはれにも見ゆらむ。佛法、僧、一切の衆生を濟度せむとて此の世にはあるものを、多感多念の青年の眼にはこれも迷の種にはあらずや。只はかなきは人の心の花衣、木

石ならぬぞ恨みなる。さとりむとの迷さへいつの世にかは消ゆべき。

## 和歌

### 雑詠

菊池神社に詣て、

桃江

名にしたは、菊池の宮の神籬の花の色香は千代もつきせえ  
ますらをか君に盡え、まこゝろをうつし出てけん岡のもみち葉  
春は花秋は紅葉の手向くさ千代よろつ代もつきせさるらむ  
正觀公の墓に詣て、

楠の木をつゆけき蔭にたちゐつゝぬるゝはかりに君はまのはゆ  
學寮冬夜

木からしの窓うつ音と聞えはあられふるなり推柴の庭に  
歳暮の感

### 元旦詠

吳竹のよなかくませと千代の松たてゝ千代もと君いはふかな  
田家煙  
ゆたかなる御代にしあれや賤か屋の煙のするものとけかりけり